

射水市親学びスクール

親子でチャレンジ！「森のサバイバル教室」

指導教員：講師 藤井 徳子

担当学生：堀 翔月、堀井 凧、前田 果鈴、前野 茉利緒、牧野 愛実、松井 碧子、
三浦 衣織、三田 百々花

I. はじめに

I. 1. 子どもたちの自然体験の現状と課題

近年子どもたちの育ちに関わる課題として、自然体験の不足が顕著となり、その重要性が再認識されている。かつての子どもたちは、放課後や休日には野山を駆け回ったり、昆虫採集をしたり、秘密基地を作って遊んだり、思いきり体を動かして遊んでいた。しかし、現代の子どもたちは習い事や塾で忙しい上に、ネットやゲーム、スマートフォンなど、屋内で遊べるものが充実して家の中にいても退屈しない環境があり、自然の中で遊ぶ機会がますます減っている。現代は3つの間といわれる「時間」「空間」「仲間」が減少しており、そのような環境の中で、子どもたちの自然体験を豊かにすることが課題となっている。近年は行政やNPOなどによる自然体験型のイベントやプログラムが盛んになってきているが、そのような自然体験プログラムが盛んになればなるほど、参加できる子と参加できない子という家庭格差が広がってしまうというジレンマも大きな問題である。どの子も参加できる仕組みづくりが必要とされている。

I. 2. なぜ自然体験が必要なのか

近年、非認知能力について、日本だけでなく世界中でその重要性が認識されている。非認知能力 (non-cognitive skills)とは、集中力、行動力、思いやり、協調性、対応力、忍耐力など、IQや点数、指数などでは測ることのできない力である。近年の研究成果から、幼児期の知的教育の効果は一時的なものに過ぎず長続きしないこと、非認知能力が認知能力の土台となること、非認知能力は幼児期から小学校低学年に育成するのが効果的であり、この時期に生まれた非認知能力がその後の人生に大きく影響するということが、明らかとなり、非認知能力が幼児教育のキーワードとしてクローズアップされてきている¹⁾。そしてこのような非認知能力は子どもが主体的に行う遊びによって生まれ身につくとされており、自然という多様性の高い環境の中で、自ら興味を持って観察したり遊んだりすることがとても有効であると考えられる。

II. 目的

どの子にも豊かな自然体験の機会を提供し、親子が一緒に体験できる機会をつくること、および保育士を志望する学生が自然保育技術や実践力をつけることを目的として、射水市親学びスクール「親子でチャレンジ！『森のサバイバル教室』」（主催：射水市教育委員会、協力：射水市ビオトープ協会、富山森のこども園）に参加する。

III. 方法

下記の親子自然体験活動に参加し、親子の関わり方を観察するとともに、子どもたちや親子の体験活動を支援した。

日時：2020年10月20日（火）15時～16時30分 現地地下見、リハーサル
2020年10月31日（土）10時～12時 開催

場所：射水市青井谷ビオトープ

主催：射水市教育委員会

協力：射水市ビオトープ協会、富山福祉短期大学、富山森のこども園

参加者：射水市内の小学生親子 17組 38名、学生スタッフ（富山福祉短期大学幼児教育学科 2年生 2名、1年生 10名）

内容：親子でチャレンジ！「森のサバイバル教室」

1. クイズ「サバイバル 5 要素」
2. 森の散策、薪ひろい
3. 紙芝居「火おこし」「火の始末」
4. メタルマッチと空き缶ウッドストーブで火おこし
5. 火の始末

IV. 結果

今回の森のサバイバル教室では、親子で木の枝を拾いメタルマッチで火を起こしソーセージとマシュマロを焼いて美味しく食べた。子どもたちは枝を拾う時に湿っていないかななどを考えてよく見て親子で選別していた。「この枝燃えるかな」「たくさん拾ったよ！」などと会話をしながら、協力して拾っていた。枝を集めた後は親子でメタルマッチを使って火おこしに挑戦した。直ぐに火がつく親子もいれば、なかなかつかない親子もいた。燃えやすい麻紐や松ぼっくりを空き缶ウッドストーブに入れたり、どうしてもつかないときの最終兵器として用意しておいたワセリンを含ませた脱脂綿を入れたりしながら、何度も試行錯誤している様子が見られた。スタッフのメタルマッチをつける手首の動きを一生懸命観察してから、自分たちも動きを真似て火おこしに励んでいる親子も見られた。火をつけることができた子どもたちは「出来た！」「やっとなつたー」などと言い、達成感を得られたように見えた。火がついた親子からソーセージとマシュマロが配られ、仲良く話をしながら味わい、家族団欒をしていた。自分で火を一から起こして消えないように維持し、自分で焼いて食べるなどの普段は出来ないような活動を楽しんでいる笑顔の親子がたくさん見られ、終始にこやかな雰囲気だった。食べ終わった親子から火を消して、みんなで歌を歌い今回の活動は終わった。歌を歌っているとき、一日の活動が走馬灯のように頭に思い浮かんで、改めて楽しかったなと思えることができた。きっと参加した子どもたちや保護者の方々も、「楽しかった」「またやりたい」と思えたのではないかな。

V. 考察

今回参加した自然体験活動の中では、子どもたち自身が、火起こしなど少し危険なことに挑戦している姿や、燃料となる枝を探して嬉しそうに山を駆け回っている姿、保護者や学生と一緒に協力しながら活動する姿など、普段は見られない姿をたくさん見ることができた。自然保育は「五感で自然を感じる」とか「自然の楽しさを知る」というだけでなく、それ以上に、挑戦心や協調性、やり抜く力など、幼児期に育むべき大切なものを学べる保育であることを実感できた。

保護者の方々も、子どもたちが自然の中でいきいきと活動する姿を見て、本当に嬉しそうにしておられた。また大人自身も焚き火や食べ物を焼いて子どもと一緒に食べるなど、童心に帰って楽しんでいる様子も印象的だった。他の家族と交流しながらたわいのない話をし、子どもたちがのびのびと自由に遊ぶ時間は普段中々ないと思うので大人にとっても貴重な時間であったと考えられる。子どもたちにとっても、嬉々として遊ぶ大人の姿を見られたことはとても嬉しかったに違いない。そのような大人たちの中で、子どもたちは心から安心して、おおいにのびのびと遊ぶことができるのだろう。

このように、自然体験を親子で共有することは、自然に関する知識や技術が身につくことはもちろん、親子の良好なコミュニケーションを築くことも期待でき、子育て支援プログラムとして非常に有効であるといえる。親子参加のプログラムを企画する際には、子ど

もの興味関心だけではなく、「大人も楽しめる」「親子の対話が弾む」ことにも十分配慮する必要があると考える。

VI まとめ

近年子どもたちは自然体験の機会が減少しており、自然豊かな富山でも同様の課題がある。そのような社会的背景の中で、今回は、自治体・大学・NPOが協働して親子の自然体験プログラムを開催することができた。子どもたちに楽しい自然体験の機会を提供できただけでなく、親子で体験を共有する場の提供としても大変有意義であった。

また私たち保育者を志す学生にとっても、自然保育や保育環境について実践を通して学ぶ貴重な機会となった。海外では、森のようちえんなど、自然環境を活用した保育が盛んになってきている。日本でも保育所や幼稚園でもっと自然保育を取り入れることができれば、すべての子どもたちの豊かな幼児期の保障につながる。自然保育を実践できるかどうかは保育者次第なので、私たち未来の保育者の責任は重大である。今後はさらに自然保育について知識理解と保育技術を高め、子どもたちと自然をつなぐ保育が実践できるようになりたい。

参考文献

- 1) ベネッセ教育総合研究所 これからの幼児教育 2016年春号,pp.18-21